

玉虫厨子制作年代考(三)

——文献上より見た玉虫厨子の制作年代について——

上 原 和

一、玉虫厨子の法隆寺移坐年代について

玉虫厨子は、ひさしく、法隆寺金堂の建築の雛型のように考えられ、珍重されてきた。

確かに、玉虫厨子の形姿の美しさは、この仏龕の、宮殿様とも称すべき、建築的諸意匠に負うていと云つて差支えない。玉虫厨子は、その縁飾りの透彫金具の下に玉虫の彩翹を伏せてあつたところから、今日、玉虫厨子の名をえているわけであるが、古くは、こうした形姿の仏龕は、一様に宮殿像とのみ呼ばれていたものと思われる。即ち、天平十九年二月十一日に勘録された、法隆寺伽藍縁起并流記資財帳には、次のような記載がみえている(註一)。

宮殿像貳具 一具金塗押出千仏像
一具金塗銅像

また、同様な記載は、同じく天平十九年二月十一日に勘録

された、大安寺伽藍縁起并記資財帳にも、次のようにみえている(註二)。

宮殿像二具 一具千仏像
一具三重千仏像

天平年間、南都に華を競つた諸大寺は、十指を屈してなお余りあるが、今日、天平勘録の資財帳が残されているのは、僅かに、この法隆・大安の二寺のみである。その稀少同種の両資財帳に、同じく宮殿像の記載がみられるので、少くとも奈良時代においては、今日の玉虫厨子にみるような、木造伽藍建築を模したと思われる仏龕は、一様に宮殿像と呼ばれて、当時の諸大寺にそれぞれ奉安されていたものと考えられるのである。なお、宮殿像という、この歴史的な呼称は、恐らくは、瓦葺の宮殿建築の造営が盛んになった奈良時代に入つてからのものと思われる。

処で、この法隆寺伽藍縁起并流記資財帳にみられる、宮殿

像貳具という記載が、はたしていまの法隆寺にある玉虫厨子を指すものであるか否かについては、未だ確証がないので、明確な断定は控えなければならないが、この宮殿像貳具のうち、一具金塗押出千仏像を玉虫厨子とし、他の一具金塗銅像を同じく法隆寺金堂に伝えられてきた、橘夫人厨子とみるのが、今日一般の見方である。しかし通説とも云うべきこの見方に対して、いまだで疑義が全くなかつたわけではない。例えば、故田中豊蔵博士は「玉虫厨子に関する考察」（註三）のなかで、次のように述べておられる。

「此宮殿像二具中の『一具金塗押出千仏像』といふものを玉虫厨子にして、他の『一具金塗銅像』といふものは橘夫人厨子ならんといふ。若し然らば玉虫厨子は殆んど本寺創立を去ること遠からざる頃、已に寺内に儼存せしものと見るべし。然れども此説には頗る疑点あり。何となれば本厨子は決して押出千仏像を本尊とせしにあらずして、後に説く如く、別に本尊あればなり。単に『銅像』とあるを橘夫人厨子に係ける筆法にては『押出千仏像』を玉虫厨子に係け難く、玉虫厨子また畢竟『銅像』たるに過ぎざればなり。次に此『宮殿像貳具』即ち一基の玉虫厨子を指すと見る説もあり。是は夾註の文に基きて言へるものにて、一往の解釋なりと思はるるも、斯る場合の『具』の字の用法を按ずるときは、終に通じ難きなり。」

この一文に表明された田中博士の疑義は、要するに、この資財帳に記載されている宮殿像貳具中の一具は、金塗押出千

仏像と記されているが、玉虫厨子そのものは、本来仏龕であり、そのなかに安置された仏像自体が本尊であつて、決して資財帳の記載にみるような押出千仏像を本尊としたものではない。故に資財帳の記載は、玉虫厨子を指すものではないという御意見なのである。なお、この玉虫厨子の本尊が何であるかについては、更にこの後で、釋迦像との見解を述べておられる。もつとも、田中博士は、玉虫厨子を、はつきり仏龕という言葉では云つておられない。即ち「思ふに、仏塔にしては舍利なし、仏殿にしては本生図あり、この矛盾を避くるには遂に仏塔にして仏殿を兼ねぬといふ奇妙な存在を許すより外なけん」（註四）と述べておられる。この解釋に対しても疑義があるが、いずれ後で論ずることとして、いまは、資財帳記載の金塗押出千仏像を、宮殿像の一つの本尊とみる田中博士の見解の是非を検討するにとどめたい。思うに、この田中博士の御説は、いささか速断にすぎたものと考えられる。何故ならば、宮殿像貳具の下に記された註記は、かならずしもその宮殿像の本尊を意味してはいないからである。これは二つの宮殿像を区別するために、夫々の宮殿像の特徴を記したまでのことである。仏龕の形態もともに宮殿様であり、また仏龕内の本尊もともに金塗銅像であるような場合には、しよせんその光背や後堀乃至は周壁など外形上の特徴をもつて、両者の一応の区別をなすのが自然と思われる。それもきわめて簡略にである。大安寺資財帳における宮殿像二具の夾註も僅かに一具千仏像、一具三重千仏像とのみ區別されているに

すぎない。また同資財帳には、木葉形仏像一具というような記載例もみえてゐる。要するにこれら資財帳もまた、財産目録である以上、その品目と点数のみが、簡潔かつ正確に記録されれば、それで用は済むのであり、かならずしも本尊名の記載を必要とはしなかつたのである。これは、法隆寺、大安寺両資財帳に徴して明らかである。このように見てくると、法隆寺資財帳記載の金塗押出千仏像を宮殿像の本尊と目するが故に、この宮殿像をもつて釋迦像を本尊とする玉虫厨子と同一のものとは考えられぬという田中博士の説は、たちまちその根拠を失ふことになるのである。

なお、田中博士の文中にみえてゐる「宮殿像貳具」をもつて、一基の玉虫厨子を指すものと思はれるが、源豐宗氏も、かつて博士の御説を引いたものと思はれるが、源豐宗氏も、かつて「玉虫厨子は、明らかに千仏像と金銅像の二具を有してゐるのに、千仏像のみを玉虫厨子のものとしてゐる説は、全く事実と契はらない」(註五)として、滝博士の解釋に一応加担せざるをえない旨述べておられたが、私は、田中博士同様、この滝説には賛意を表するわけにはゆかない。仏龕とそのなかに安置されるべき本尊とを各々独立した一具として別箇に数えるが如き解釋は、本来、デヴォーショナルな関連のみにおいて把えられるべき筈の仏像と仏龕の有機的一元性を、敢て無視した索引附会の説であり、少くとも、ここで問題にしてゐる法隆寺、大安寺両資財帳における他の記載例から推して、このような解釋が成り立つものとは考えられないのであ

る。

さて、さきに述べたように、私は、法隆寺資財帳記載の宮殿像貳具中の一具金塗押出千仏像を、宮殿像の本尊とは見ずに、この宮殿像の特徴として挙げられた本尊の莊嚴と見てゐるのであるが、そう考えてくると、この宮殿像の特徴は、現在の玉虫厨子の宮殿様仏龕の内壁に、碁盤編のように緻密に莊嚴されている金銅押出千仏像とよく符合するのである。法隆寺資財帳に記載されたこの金塗押出千仏像を夾註とする宮殿像を、現在の玉虫厨子に擬する一般の根拠は、この符合にあるわけであるが、しかしこの符合だけで直ちに、資財帳記載の宮殿像の一具が、玉虫厨子そのものを指すものと断定することは出来ない。何故ならば、技法的にみて、鎚起によるこの種の金銅板の押出千仏像は、型さえあれば、或る程度の量産も可能であつたと考えられるので、かつては玉虫厨子と同じように、龕内の周壁に金色燦然とした押出千仏像の金銅板を貼付した同種の宮殿像の数も少くなかつたものと思われるからである。大安寺資財帳の宮殿像二具の夾註にみられる一具千仏像、一具三重千仏像の記載によつてみて、このことは十分に考えられるところである。そこで、では現在の玉虫厨子は、いつ頃から法隆寺の金堂に安置されていたのであるうかという問題が、あらためて提起されることになる。

法隆寺蔵の、この玉虫、橘夫人両厨子について記述された古記録の一つとして、鎌倉時代に、法隆寺の寺僧顯真によつて書かれた聖徳太子伝私記亦名古今目録抄を挙げることが出

来るが、そのなかの法隆寺金堂の宝蔵品について詳述した箇処に、次のような条が見うけられる(註六)。

次向東戸有厨子。推古天皇御厨子也。其形腰細也。蓋須弥

以玉虫羽以銅彫透唐草下臥之。此佛寺滅之時所送者也。内一万三千仏坐。

高七尺。其内金銅阿弥陀。古帳釈迦像云々。三尊御。其盗人取。光二許

尺所殘也。此内。白檀四天王長坐。為誅盗人。次西戸方有厨

子。黒漆須弥坐。光明皇后之母。橘大夫人所造也。内在三

弥陀三尊。古帳彌勒三尊云々。以金銅敷地作波之。中坐三蓮花

三本。其上令坐三尊。太子已後之尊也。高八尺。

この顕真の記述によれば、法隆寺金堂の東戸、西戸に向つてそれぞれに安置されている厨子は、その形姿の特徴より推して、現在の玉虫厨子及び橘夫人厨子を指していることは、まづ疑いえない処であるが、この顕真の聖徳太子伝私記が書かれたものと推定される仁治三年(一二四二)頃より約一世紀半を遡る承暦二年(一〇七八)十月八日に記録された金堂仏像等目録(金堂日記三帖之内)のなかにも、次のような記載がみえている(註七)。

後東厨子堂内金銅小仏三尊

西厨子同阿弥陀三尊

ここに記されている両厨子が、はたして玉虫厨子と橘夫人厨子を指すものであるかは、この簡単な記載だけからでは、全く不明であるが、顕真の聖徳太子伝私記に照してみて、はじめてこの両厨子が、聖徳太子伝私記に挙げられている玉

虫、橘夫人の両厨子であることが略々推察されるのである。即ち、この金堂日記の記載は、きわめて簡潔に本尊のみを記しているが、東厨子の金銅小仏三尊は、聖徳太子伝私記の玉虫厨子の条にある「其内金銅阿弥陀三尊御。其盗人。光二許所殘也」と、本尊名はともかくとしてもこの厨子の本尊が金銅小仏三尊であつたという点では符合しているし、西厨子の阿弥陀三尊についても、同じく橘夫人厨子の「内在弥陀三尊」と一致している。また両厨子の金堂内に東西相對する位置にも、全く変りがない点からみて、法隆寺金堂内における玉虫、橘夫人両厨子の位置は、少くとも藤原末期の承暦二年以降略々最近まで、殆んど動くことがなかつたものと考えられるのである。

ところで、この金堂日記の記載によると、承暦二年十月八日というのは、法隆寺金堂にとつては、大變動のあつた歳である。というのは、時の別当大威儀師能算によつて、いままで橘寺に安置されていた四十九軀の小金銅仏が、この日以来悉く法隆寺金堂に移遷されることになつたからである。元々この金堂日記というのは、承保二年(一〇七五)より延応二年(一二四〇)に至る百六十余年間の金堂内における諸仏像の變動を記録したものであるが、能算が法隆寺の別当になるまでは、法隆寺の金堂は久しく嚴封され、ただ別当の遷替に際してのみ僅かに唯一度開扉されるにとどまり、常灯仏供ですら金堂の正面にあたる廻廊の処で獻ずるような次第で、寺僧でさえも到底金堂内に拝跪して仏像を拝むというようなこ

とは許されなかつたのである。そこで能算は、これでは反つて聖徳太子の雅意にもそむく所以であるとして、その旨を僧綱所に申稟して遂に金堂を開き、塵まみれになつていた大小比肩の金銅仏をそれぞれ整理してその色目を記録し、また金堂の守護にあたらしめるために堂司を任命したということが承暦二年十月八日の条の金堂日記の冒頭に書きしるされている(註八)。なおこの時に、これまで講堂で修されていた吉祥悔過会も、昔どおり金堂において勤修されることになり、あらたに毗沙門天、吉祥天の木像二軀が造像されている。橘寺の四十九鉢小金銅仏の法隆寺金堂移遷もまた、別当能算によるこの金堂開扉を俟つてのことである。

では、なぜ橘寺の小金銅仏が、この承暦二年十月八日に大挙法隆寺に移遷されるに至つたのであろうか。その間の事情を、能算は次のように伝えている。

右仏像等中所以奉迎橘寺仏者彼寺住持僧仙命申送云当寺已少常住僧徒仏像嚴重已及数軀守護之輩自以懈怠者無懺之類必致誤失歟仍奉迎本寺以可安置之者所陳之旨已有其理即以承暦二年十月八日奉迎之奉安置後大厨子内畢(註九)

それにしても、「守護之輩自以懈怠者無懺之類必致誤失」とは、まことに当時の橘寺の衰退ぶりを伺いえて余りあるものといえよう。そこで想起されるのは、さきに述べた顕真の聖徳太子伝私記の「此橘寺滅滅之時。所送者也。」という玉虫厨子の由来に関する傍註であるが、ここで顕真の云つている「橘寺滅滅之時」というのは、はたしてこの承暦年間の橘

寺衰退の時を指しているものであろうか。若しそうだとすれば、玉虫厨子もまた、承暦二年の四十九鉢小金銅仏の移遷と同じ頃に、橘寺より法隆寺金堂へ移坐されていたことになるか、或はまた、このときの四十九鉢小金銅仏の移遷を、顕真がうつかり玉虫厨子の移坐と誤伝してしまつたのか、その何れかになる。しかし、金堂日記承暦二年十月八日の条の記録金銅仏像事の記載を検討する限りにおいては、玉虫厨子が四十九鉢小金銅仏と前後して橘寺より移遷されて来たということとを推定させる手懸りは全くないと云つてよい。即ち同目録には、次のように記されている。

一記録金銅仏像事

合

中尊金銅等身釋迦像一鉢 有脇士二鉢

東壇同三尺釋迦三尊

西壇小仏十八鉢 之中一鉢橘寺仏

後東厨子堂内金銅小仏三尊

西厨子同阿弥陀三尊

中大厨子

上階奉安小仏肆拾陸鉢

之中木仏一鉢又奉加納灌仏三鉢 但一鉢無頭

下階橘寺小仏肆拾肆鉢

奉加納本仏八鉢抑橘寺仏本数卅九鉢也一鉢顯奉坐西小

壇上有銘灌仏具四鉢為仏生会新奉取出之

この目録の最後に挙げられている中大厨子下階の橘寺小金銅仏の後書として、さきに引用した橘寺よりの移遷事情が詳しく記されているのであるが、思うに、この承暦二年の金堂日記には、冒頭の開金堂可修御願事をみても、またここに引用した記録金銅仏像事をみても、別当能算は玉虫、橘夫人両厨子と目される後東厨子堂内金銅小仏三尊と西厨子同阿弥陀三尊の二厨子の由来については、なんの疑念もいだいていないように見受けられる。即ち、この両厨子も、中尊の釈迦像、東壇の薬師像とともに、往古より金堂に安置されていたものとして、あやしむ処がないのである。なおこの能算による目録に疑義があるとすれば、それは東壇の金銅仏をも釈迦像としている点であるが、これは明らかに薬師像の誤りと考えてよい。四年後の永保二年（一〇八二）十月一日の条の金堂仏像等目録には、同じ箇所は東壇同三尺薬師像一鉢と訂正されている。

さてここで注目すべきことは、藤原末期に記録されたこの金堂仏像等目録における玉虫、橘夫人両厨子の記載序列の位置が、天平十九年に勘案された法隆寺伽藍縁起并流記資財帳に記された宮殿像貳具の位置に、略々相当するということである。いま煩瑣をかえりみずに、同資財帳の目録の最初の部分を挙げて、比較してみたい（註一〇）。

合仏像貳拾壹具 伍軀 肆拾張

金涅槃藥師像壹具

右、奉為池邊大宮御宇 天皇、

小治田大宮御宇 天皇、
并東宮上宮聖德法王、丁卯年敬造請坐者、
金涅槃釈迦像壹具

右、奉為上宮聖德法王、癸未年三月、王后敬造而請坐者、

金涅槃像捌具

金涅槃出銅像参具

宮殿像貳具 一具金涅槃押出千仏像
一具金涅槃銅像

金涅槃仏像壹具

金涅槃木像参具

右、人人請坐者、

檀像壹具

右、養老三年歲次己未、從唐請坐者、

金涅槃仏伍軀

右、人人請坐者、

更に、画像四十張の色目が挙げられているのであるが、いまは省略する。ここでは宮殿像貳具の記載序列の位置が、金堂日記承暦二年の金堂仏像等目録における玉虫、橘夫人両厨子のそれに、略々照応している点に留意して戴ければよいのである。すでに述べたように、能算が別当になるまでは、久しく金堂は嚴封され、ただ別当の遷替に際してのみ唯一度の開扉が許されていたという事情に鑑ても、恐らく法隆寺金堂の内部は、たとい奈良盛期と藤原末期との間に三世紀半の隔てがあつたとしても、そこに大きな変動があつたとは考え

られないのである。即ち、法隆寺資財帳における宮殿像貳具が、まぎれもなく能算の金堂日記記載の玉虫、橘夫人而厨子と同一のものであることがここに改めて確認されるならば、玉虫厨子が「橘寺滅滅之時」に移されたものであるとする顕真説は、橘寺滅滅之時を、承暦二年の橘寺四十九鉢小金銅仏移遷の前後に擬する限り、これが誤りであることは明白となる。顕真は何を根拠に「此橘寺滅滅時。所送者也。」と敢て註記したのであろうか。この疑問に対しては、長い年月の間に、橘寺小金銅仏の移遷が、玉虫厨子の移坐と混同され、その誤伝に拠つて顕真がかかる説をなしたのであると考えるのが、現在までの通説のようである。しかし私は、そうは思わない。何故ならば、顕真は、橘寺小金銅仏について記録された承暦二年の金堂日記を讀んでいたことは、既に明白だからである。即ち、聖徳太子伝私記には次の記述がみえている（註一一）。

太子本尊阿弥陀厨子之後。高在厨子。此内金銅仏菩薩像并木仏像坐。從昔口伝銀地藏菩薩五十余體坐。云云以外誤。一體所不見之也。此厨子并仏菩薩像者。從橘寺一所送之者也。日記在金堂。

承暦二年に橘寺より移遷された小金銅仏は、その後政所によつてこの大厨子に嚴封されたまま人眼に曝されることがなかったので、厨子内には銀作りの地藏菩薩が多数秘藏されているというような訛伝が久しく流布されていたものと思われるが、顕真自身は、橘寺小金銅仏移遷の事情を十分に知りえ

ていたはずである。承暦年間より一世紀半下るとはいえ、橘寺小金銅仏の移遷を、玉虫厨子のそれと混同してしまうほど顕真の金堂日記に対する読みが浅かつたとは思われないからである。また顕真は、聖徳太子伝私記の別の処で（顕真得業口決抄にも同文）（註一二）

橘寺者。法隆寺根本之末寺也。別当能算威儀師之時。被

取離一畢。承暦年中也。而鳥羽院之御時。醍醐範俊僧正。

取離於当寺一畢。（中略）理不尽被取離一畢。

と記している。

ここで、「別当能算威儀師之時。被取離一畢。」というのは、云うまでもなく橘寺小金銅仏の移遷を指しているのであるが、顕真は必ずしもこれを以て「橘寺滅滅之時」とは見做していない。むしろ顕真にとつての一大痛恨事は、その後、鳥羽院の時に、院の寵愛をうけた範俊僧正によつて、草創以来の法隆、橘兩寺の密接な關係が断ち切られたことにある。「橘寺者。法隆寺根本之末寺也。」という冒頭の一行には、熱烈な太子信仰者としての顕真の痛憤のおもいがこもるのである。

では、草創の法隆寺と橘寺とは如何なる關係にあつたのであろうか。法隆寺縁起并流記資財帳のはじめには、太子建立七寺の名が次のように挙げられている。

奉為池邊大宮御宇

天皇并在坐御世御世

天皇、歲次丁卯、小治田大宮御宇

天皇并東宮聖德法王、法隆學問寺、并四天王寺、中宮尼寺、橘尼寺、峰丘寺、池後尼寺、葛城尼寺乎、敬造仕奉、

上宮聖德法王帝説はじめ關係文獻の「太子起七寺」の寺名は、概ねこれに準拠しているが、就中橘尼寺の建立縁起については、聖德太子伝暦に、次のような奇瑞譚が伝えられている（註一三）。即ち、推古天皇十四年秋七月、太子が勝鬘經を御前で進講なさつたときのことである。

太子受_レ天皇請_二。其儀如_レ僧。三日而竟。講竟之夜。蓮花零。花長二三尺。而溢_二方三四丈之地。明旦奏_レ之。天皇大奇。車駕而覽_レ之。即於_二其地。誓立_三寺堂。是今橘寺也。

以上が、伝暦に記された橘寺建立の縁起であるが、勝鬘經の講讀されたというこの橘宮は飛鳥の高市郡にあり一般には太子誕生の地と目されている。太子の父君御名を橘豊日尊と申上げた用明天皇のかつての宮殿であり、太子はここで御養育をうけられたが、父君御即位により磐余の池_{（いほのうみ）}迎_{（むか）}雙槻宮に移遷なされて後は、譲り受けられて太子の御宮となされたのである。推古天皇の皇太子として万機を撰政なされたのも、この橘宮であつた。推古天皇九年、太子は初めて斑鳩に新しく宮をお造りになられたのであるが、橘宮が推古天皇の小墾田宮に近いところから、政務はやはりこの橘宮でなされたものと推察されるのである。推古天皇十四年におけるこの勝鬘經の御進講については、その歳の法華經講讀とともに、日本書紀推古天皇十四年の条にも次のようにみえている（註一四）。

秋七月、天皇請_二皇太子、令_レ講_三勝鬘經、三日説竟之。是

歳、皇太子亦講_二法華經於岡本宮。天皇大喜之、播磨国水田百町、施_二于皇太子。因以納_二于斑鳩寺。

伝暦の伝えるように、勝鬘經講讀の後には、橘宮に推古天皇を願主とする橘尼寺が建立され、いまた法華經講讀の後に、太子の學問寺として法隆寺の造営が行われることになつたのである。橘・法隆両寺はその草創において、すでにこのような深い因縁がみられるのである。

さて、そこで先ほどより懸案になつている、顯真の「橘寺滅滅之時。所_レ送者也。」という玉虫厨子移坐説についてであるが、すでに述べたように、この「橘寺滅滅之時」が承暦二年の橘寺小金銅仏四十九軀の移遷と全くかわりがないとすれば、玉虫厨子が法隆寺に移坐されたのは、はたして何時のことであろうか。ここで想起されるのは、日本書紀天武天皇九年（庚年天武朝八年_二六八〇_一）の条の（註一五）

乙卯、橘寺尼房失火以焚_二十房。

という橘寺失火の記録である。尼房十房の焼失は、一尼寺にすぎない橘寺にとつて決して小さな罹災とはいへぬ。人々がそこに橘寺衰退の兆をみたとしても、不自然とは思われぬ。この失火が、宝蔵諸物の移遷を促す機縁となりうることは、十分に考えられることである。また橘寺滅滅という記載については、顯真が法隆寺の寺僧である以上、火を忌む配慮から、記録の上にも火災の記事をとどめることなく、橘寺失火を敢て滅滅と記することもありうることである。天智天皇九年の法隆寺罹災についても、法隆寺伽藍縁起をはじめ寺側

の記録は、すべて口を減して触れることがないのも、同様に十分理由のあることと云えよう。こう考えてみると、顕真のいう「橘寺滅滅之時。所_レ送者也。」という玉虫厨子移坐の時期は、概ね、天武紀九年の橘寺失火後間もなくの時代と推定されてくるのである。この玉虫厨子の移坐に関して、はたしてその頃までに、再建法隆寺の金堂が竣工しえていたであらうかが問題になる。私は、この天武紀九年の前後には、法隆寺金堂は一応の竣工をみせたものと考えている。その理由については、後に詳しく述べたいと思うが、ともあれ、ようやく復旧をみた新金堂に、それまで諸々に分散していた旧法隆寺乃至は太子由縁の仏像や仏具が次々に奉納されはじめ、玉虫厨子もまた、そうした時期に太子由縁の遺品の一つとして橘寺より搬入されたものと考えるのは、推測に過ぎるであらうか。

玉虫厨子を由緒ある遺品として「推古天皇御物也」と目するのには、すでに述べたように、聖徳太子伝私記における顕真の説であるが、現在の処、玉虫厨子をこのような由緒ある遺品とは考えられないと云うのが、一般の考え方と云えよう。では、顕真は、何を根拠としてこの説をなすのであろうか。同じく顕真の撰にかかる太子伝古今目録抄の、次の記載は、それを釈く一つの手がかりと云える(註一六)。

菩提橘尼寺 推古天皇宮也。聖徳太子建_二立厨子仏像_一。南有_二仏頭山_一。太子勝覺經講讚之時。雨_二蓮花_一地也。

顕真は、ここで橘尼寺を推古天皇宮としているが、後に法

隆寺の俊嚴によつて私註された顕真得業口決抄にも(註一七)

橘京、當時橘寺者。昔講經跡也。又語云。勝万經講讚。

自_二七月十五日_一三ヶ日。十八日朝花雨_{フル}。其朝始_二前山千仏

頭出給。或十六日_一始_二之_一。

或書云。太子自_二鴈宮_一。每日令_レ詣橘寺推古天皇宮。以下略

と記されている。ともに橘寺を推古天皇宮となしているの

あるが、御誓願のこの橘寺を、篤信の天皇が常住の宮とな

されることも十分に考えられる処である。ここで注目される

のは、太子伝古今目録抄に記されている「聖徳太子建_二立厨

子仏像_一」という一行である。恐らくこれは、顕真が伝えら

れた古文獻の一行をその儘転載したものと考えられるが、こ

の太子造像の厨子仏像を玉虫厨子に擬するのはなお臆測に過

ぎるであらうか。太子の勝覺經進講にいたく感激なされた推

古天皇が「即於_二其地_一。誓立_二寺堂_一。」なさつたその橘尼寺に、

太子が、推古天皇の念持仏として玉虫厨子を寄進なされると

いうことも、十分にありうることと云えよう。玉虫厨子の優

雅にして繊細な宮殿様の意匠は、女帝推古天皇の念持仏とし

ては、まことにふさわしく思われてくるのである。またこの

ように考えてくると、厨子の彩絵にみる捨身銅虎、施身問偈

の着想にも、太子の信仰を思わずにはいられないのである。

さて、これまで橘寺の草創と太子との密接な関係について

述べてきたのであるが、玉虫厨子をしてはたして「推古天皇

御厨子也」と目するか否かはしばらく措くとしても、玉虫厨

子が法隆寺金堂の再建間もない時期に、「法隆寺根本之末寺」

たる橘寺より移遷されてきたであろうことは、すでに十分に推察しえたことと思う。故に法隆寺資財帳に記載されている宮殿像貳具のうちの一具金塗押出千仏像を橘寺移遷の玉虫厨子と目しても年代的には支障はないものと私は考えている。

なおここで、宮殿像貳具のうちの他の一具金塗銅像を、橘夫人厨子にあてるか否かであるが、その造像様式よりみて、法隆寺資財帳の勘案された天平十九年より以前に、その制作年代をおくことは妥当と思われるし、また、若し顕真の云うように「光明皇后之母。橘夫人所造也。」ということであれば、法隆寺東院伝法堂の寄進者である藤原不比等夫人橘三千代の篤信より推して、この宮殿像が法隆寺金堂に奉納されることも十分に考えられる処である(註一八)。顕真が、何に據つてこの厨子を橘夫人の造像とみなしたかは不明であるがともあれ、法隆寺資財帳の勘案された天平年間には、現在みる処の玉虫、橘夫人両厨子はすでに金堂内に奉安されていたものと考えてよい。

では、玉虫厨子の法隆寺移坐年代と目されうる天武天皇年間には、はたしてこの法隆寺金堂は再建をみていたであろうか。ここに法隆寺金堂の再建年代が、改めて相關的に問われてくるのである。

(註一) 「大日本古文書」二 五八一頁

(註二) 前掲書 六二六頁

(註三) 「大塚博士還暦記念美学及芸術史研究」(昭和六、一、

一〇) 八〇一頁

(註四) 前掲書 八二四頁

(註五) 源豐宗「玉虫厨子及其の絵画について」『仏教美術第一三冊』(昭和四、六) 一四頁

(註六) 高楠順次郎・望月信享共編「聖德太子御伝叢書」九七頁

(註七) 法隆寺資料彫刻篇第二輯「宝蔵小金銅像」文獻六八、六八頁

(註八) 前掲書 文獻六八 六八頁。同じく法隆寺政所參簡條状の一、開金堂可修御願事に拠る。

(註九) 前掲書 文獻六八 七〇頁

(註一〇) 既出「大日本古文書」二 五八〇頁

(註一一) 既出「聖德太子御伝叢書」九九頁

(註一二) 前掲書 一一五頁。なお俊嚴編の「顕真得業口決抄」は、同書一三頁。聖德太子伝私記には、数字虫食で不明な処があるので、顕真得業口決抄の同文で補記しておく。

(註一三) 前掲書 二四頁。伝暦二巻の撰者は平氏撰となつてゐるが、この平氏に關しては、太子伝古今目録抄や聖德太子伝雜勘文等には、平朝臣基親であるとして、本書が正暦三年(693)に出来たものと伝え、また一説には、その頃の人季真の作とも云う。聖善鈔にはこの二説のほかは平郡翁丸の作とも云つてゐるが、藤原猶雪氏は延喜一七年(917)九月、藏人藤原兼頼の撰であることを提唱している。太子伝中の根本資料の一つとして逸することは出来ない。

(註一四) 日本古典全書「日本書紀」四 二四二頁

(註一五) 前掲書「日本書紀」六 八七頁

(註一六) 既出「聖德太子御伝叢書」七九頁

本書は同じく顯真の聖德太子伝私記亦名古今目録抄とは異本。平氏撰聖德太子伝曆の補記、かつ注釈として輯録されている。

(註一七) 前掲書 一三五頁

(註一八) 橘夫人の伝法堂寄進に関しては、はたして邸宅をその

儘寄進したものであるか否かについて、久しく疑義もたれたが、先年の所謂法隆寺昭和修理によつて、左のことが明かにされた。昭和修理の責任者である浅野清博士は「法隆寺建築綜観」(昭和二八年刊)のなかで、次のように述べている。

「伝法堂は東院資財帳に

瓦葺講堂壹間 長八丈四尺 広三丈六尺
奉納橘夫人宅者善湊師申奉納

とあるものに相当する。奉納橘夫人の邸宅を移したものであるとの説が流布されているが、既に諸先学の指摘していられるように、宅が邸宅を意味しないことは、同じ資財帳の施入の仏具什物を羅列した次に「右天平十四年歲次壬午二月十六日正三位橘夫人宅奉納賜者」の如く記載されているによつても明瞭である。即ち宅は単に一の敬称の如く用いられたものと考えられるのである。従つてこの文意からは橘夫人が奉納したことが明らかにされるのみで、それが物そのものを納めたのであるか、それを造る資を入れたのであるかも決し難い問題であつたのであつた。然るに今回この建物を解体調査して行くと、

五間の建物を移建して七間に増築されたものであることが判り、更にその移建前の建物の復原が可能となつて、意匠はむしろ仏寺建築の豪莊さを持つに拘らず、その間取から考えると、仏寺建築と見ることは到底無理で、邸宅中の一屋であろうと考えられるに至り、改めて或は橘夫人自らの邸宅を施入したことの可能性も生ずるに至つたのである。」(二六八頁)

二、玉虫厨子と法隆寺金堂の再建年代について

すでに見てきたように、法隆寺伽藍縁起并流記資財帳に記載されている「宮殿像貳具」のうち、一具は玉虫厨子を指すものとみて、まず誤りないものと考えられるのであるが、ではこの玉虫厨子は、いつ如何なる理由によつて、法隆寺金堂に安置されることになつたのであろうか。玉虫厨子の制作年代もまた、この問題の解明を俟つことなしには、解決の緒口を見出し得ないものと思われる。

さて、この件に関しては、すでに述べたように、聖德太子伝私記名亦古今目録抄に記載された「此橘寺滅滅之時、所送者也」という顯真の玉虫厨子移坐説に対して、私はその玉虫厨子移坐の年代を、日本書紀によつて伝えられている天武天皇八年(六八〇)の橘寺失火の頃と見做したのであるが、ここで問題になるのは、天智天皇九年(六七〇)罹災を伝えられている法隆寺の金堂は、私が玉虫厨子移坐年代として推

測するこの天武八年（六八〇）頃までには、はたして諸像を迎えて堂内に安置しうるほどまでに再建されていたのであるうかということである。即ち、法隆寺金堂の再建年代が、ここで改めて問われてくるのである。

法隆寺の再建年代を考える上で、まず確めておかなければならぬのは、旧法隆寺罹災の時期であるが、かつて法隆寺再建非再建論争の発端をなした日本書紀天智天皇九年四月三十日の条の（註一）

夏四月癸卯朔壬申、夜半之後、災_レ法隆寺、一屋無_レ餘。大雨雷震。

という記録に據つて、法隆寺罹災の年代を天智天皇九年（六七〇）とみるのが、今日一般の説と云つてよい。同じく前年の天智天皇八年十二月の条にも（註二）

十二月、災_二大蔵。是冬、脩_二高安城_一收_二畿内之田税_一。于_レ時災_二斑鳩寺_一。

という法隆寺の失火が記録されている。この相次ぐ災禍に山背大兄王一族なきあとの法隆寺の衰運が伺われはしないであろうか。処で、法隆寺の全焼したという天智天皇九年四月三十日は「庚午」年であるが、上宮聖德太子伝補闕記には（註三）

庚午_{七十四}年四月卅日夜半、有_レ災_二斑鳩寺_一。

という記載がみえ、また聖德太子伝曆下巻にも（註四）、同様な記載がみえている。

又説_{庚午}年四月卅日夜半。災_二斑鳩寺_一。而曆録不_レ記。此年是

推古天皇十五年矣。

補闕記も伝暦もともに、略々編年体に記述された太子の伝記と云つて差支えないのであるが、この庚午年の記録は、一応は夫々太子生前中の推古年間的事件として扱われているが、補闕記においては、庚午年の一行は前後にある太子傳記とは全く無関係にしかも唐突に挿入されており、他方、伝暦もこの条を、補遺の一説として巻末に挿入しているに過ぎない。しかもこの庚午年を推古年間に充てるならば、当然それは、天智天皇九年より千支一運六十年を繰上げた推古天皇十八年であるにも拘らず、伝暦では「此年は推古天皇十五年矣」と誤註している。なお補闕記における庚午四十七年と云うのは、太子生年の謂であるが、同じく補闕記のなかの（註五）

太子生年卅六。己巳四月八日。始製_二勝覺經疏_一。

という記載に徴すれば、斑鳩寺災上の庚午年は己巳年の翌年である処から、庚午年を太子生年卅七とみたのであろう。四十七年は卅と見誤つてのことと思われる。ともあれ、補闕記の編者も、伝暦の編者も、「庚午年四月卅日夜半。有_レ災_二斑鳩寺_一。」という一条を編年するに際しては、甚だ自信のなかつた様子が伺われるのである。千支一運説として有名な平子鐸嶺氏の非再建論は、この補闕記の記載に依據し、法隆寺罹災の庚午年を、天智九年（六七〇）より千支一運繰上げて推古天皇十八年（六一〇）と見做しているのであるが、私は、補闕記、伝暦にこの「庚午年四月卅日夜半。有_レ災_二斑鳩寺_一。」の一条があることによつて、反つて天智天皇九年の法

隆寺全焼の記録に信憑性の強まるのをおぼえるのである。即ち編年の当否をしばらく措くとしても、庚午年に法隆寺が災上したという事実は、もはや覆いがなくなつたからである。

なお、この補闕記及び伝暦には、更に次のように法隆寺罹災後の記録がみえてゐる。若し、庚午年を推古天皇十八年とするならば、右の記録もまた当然推古天皇十八年から程遠くない頃となるが、それではいささか疑念が残るのである。

斑鳩寺被災之後、衆人不_レ得_レ定_三寺地_一。故百濟入師率_二衆人_一令_二造_三葛野蜂岡寺_一。令_二造_三川内高井寺_一、百濟聞師。圓明師。下永君雜物等三人合_二造_三三井寺_一。

これは補闕記に據つたものであるが（註六）、伝暦の記録もこれと略々同様である。ここで注意すべきは、最初の「斑鳩寺被災之後、衆人不_レ得_レ定_三寺地_一。」という一行である。これは明かにこの罹災が、日本書紀天智天皇九年の条に記されているように「災_三法隆寺_一、一屋無_レ餘_一。」というが如き茫然自失の惨狀であつたことを示している。若しもこれが太子在世下であつたならば、はたして「衆人不_レ得_レ定_三寺地_一。」というやうなことがありえたであろうか。補闕記も伝暦も、この斑鳩寺終焉の記録を、皇極天皇二年（六四三）十一月斑鳩寺塔内において非業の死を遂げた山背大兄王子一族のあとに記しているのは、必ずしも偶然ではない。太子の後裔の悲惨な最期に、すでに法隆寺衰運の兆はみえていたのであり、天智天皇九年四月三十日夜半、遂に「災_三法隆寺_一、一屋無_レ餘_一」ことなくすべては烏有に歸したのであつた。補闕記及び伝暦に伝

えられた「庚午年四月卅日夜半。有_二災_三斑鳩寺_一。」の庚午年は、当然、天智天皇九年を指すものであり、日本書紀におけるこの庚午年法隆寺罹災の記録は、補闕記、伝暦の傍證をえて、いよいよその信憑性を強めることになつたのである。

さて、では罹災後の法隆寺は何時再建されたのであろうか。思うに、再建年代を考へる上で、久しくその根據となつてゐたのは、真福寺文書所謂七大寺年表（註七）における和銅元年戊申。依_レ詔造_二太宰府觀世音寺_一。又作_二法隆寺_一。であり、また伊呂波字類抄（註八）における次の記載であつた。

法隆寺七大寺内也。和銅年中造立縁起云、推古天皇第十五
年、聖德太子斑鳩宮西、建_二伽藍_一、名_二法隆學問寺_一、安_二置仏舍利_一、本朝始_テ法華、維摩、勝鬘三部_一大乘、於_二此寺_一
始來教法始_ル所故、名_二學問寺_一。

七大寺年表や字類抄に據るかぎり、法隆寺は和銅年間に再建されたものと考えられるわけであるが、この和銅再建説の裏付けとしてつねに挙げられるのは、法隆寺資財帳の次の記載である（註九）。

合塔本肆面具攝_一具涅槃像土_一 一具弥勒像土_一
右、和銅四年歲次辛亥、寺造者、 一具分舍利仏土_一

合金剛力士形貳軀在中門

右、和銅四年歲次辛亥、寺造者、

即ち、今日みる処の法隆寺五重塔初層四面の仏伝の光景を描いた塑像群と、同じく中門の力士像とが、夫々和銅四年

(七一)に造像された旨、ここで明らかにされている。法隆寺資財帳には、旧法隆寺の罹災についても、また再建の過程についても全く触れる処がないので、この五重塔の塑像群及び中門の力士像の造像年代が、法隆寺の再建年代を推す上で貴重な手がかりとなることは否めないであろう。とくにこの両造像が、寄進によるものでなく「寺造者」と明記されているのは、五重塔初層の塑像群が五重塔造営に、また中門の力士像が中門造営に、夫々建造物に附帯して造像されたものであることを示すものとみてよいであろう。この両造像が、

こうして五重塔及び中門造営ものの画竜点睛の役を果すものであるとすれば、この両造像の制作年代は、確かに法隆寺伽藍、少くともその五重塔及び中門の最終的な竣工年代をあらわすものと考えられるのである。七大寺年表の記載が何に據つたものかは不明であるが、字類抄における法隆寺再建和銅説は「和銅年中造立縁起云」という記載より推して、この「縁起」が法隆寺伽藍縁起并流記資財帳を指すものである以上、字類抄の編者は、明かに同資財帳における五重塔塑像、中門力士像の和銅四年造像の記録に據つて、法隆寺の「和銅年中造立」の説をなしたものと考えられるのである。

いま、和銅四年における法隆寺五重塔初層の塑像群及び中門の力士像の造像年代が、法隆寺伽藍、少くともその五重塔及び中門の最終的な竣工年代を示すものである所以を述べてきたのであるが、では、法隆寺伽藍中まず最初に再建に着手されたと思われる金堂が、略々儀式を営みうるほどまでに一

応の竣工をみたのは何時頃であろうか。次に法隆寺金堂の再建年代について検討してみたいと思う。

法隆寺金堂の再建年代については、現在の処、久野健氏の次の見解が、概ね最近の説を代表するものとみて差支えないと思う(註一〇)。

「私は、薬師寺金堂薬師三尊と金堂壁画との関係や、金堂壁画、天井板文様と五重塔壁画及び天井文様の関係や顔料等の考察から、金堂建築は、天武・持統両朝頃から長時間かかつて造営され、塔や中門は、それよりおくれ、これも和銅年間頃には、完成したものであらうと想像している」

私もこの久野氏の説に大体賛成である。同氏の説は主として様式比較の上からなされたものであるが、私は、ここでは問題の検討を文献の上に限定し、出来うれば更に金堂の再建年代をせばめたいと思う。何故ならば、天武初期と持統末期とはすでに約二五年のひらきがあるからである。

さて、先きほど、法隆寺五重塔及び中門の再建年代を考える上で、法隆寺伽藍縁起并流記資財帳の記載を逸することが出来なかつたのであるが、金堂の再建年代の検討に多くの示唆を与えているのは、やはり同資財帳を措いて外にないと云える。私はさきに、日本書紀に據つて橘寺失火の伝えられている天武天皇八年(六八〇)頃には、法隆寺金堂は諸像を堂内に迎えて安置しうるほどまでに再建されていたものと推測される旨述べておいたのであるが、次にその論據を、法隆寺資財帳の記載に徴して述べてゆきたいと思う。

いま資財帳の目録に據つて、夫々造像銘のある藥師本尊及び釈迦本尊を除いたすべての資財帳記載の色目から、奉納者名の記されているものを、和銅年以降を除外して順を追うて列挙してみると次のようになる(註一一)。

(1) 金光明經壹部 八卷

右、甲午年、飛鳥淨御原宮御宇 天皇請坐者

(2) 法華經疏參部 各四卷

維摩經疏壹部 三卷

勝鬘經疏壹卷

右、上宮聖德法王御製者

(3) 經臺壹足

右、癸巳年十月廿六日、飛鳥宮御宇 天皇為仁王會納

賜者

(4) 金塗銅灌頂壹具

右、片岡御祖命納賜、不知納時

(5) 合蓋壹拾壹具

仏分肆具 一、具紫

法分柒具

壹具 紫具

右、癸巳十月廿六日仁王會、納賜飛鳥宮御宇 天皇者

(6) 合通分繡帳 其帶廿二条 鈴三百九十三

右、納賜淨御原御宇 天皇者

(7) 黄帳壹帳 長九尺六寸

緑帳壹帳 長九尺八寸

幅二幅半

長 八尺三寸
幅 二幅

右、癸巳年十月廿六日 仁王會、納賜飛鳥宮御宇 天皇者

このうち、奉納者名とともに、奉納年の明らかなのは

(1) の甲午年、飛鳥淨御原御宇 天皇

即ち、持統天皇八年(六九四) 持統天皇

(3)(5)(7) の癸巳年、飛鳥宮御宇 天皇

即ち、持統天皇七年(六九三) 持統天皇

であるが、癸巳年の仁王會の為の納賜は、日本書紀持統天皇七年十月二十三日の条の(註一二)

己卯、始講仁王經於百國、四日而畢。

の記載によく照応し、甲午年の金光明經納賜もまた、同じく日本書紀持統天皇八年五月十一日の条の(註一三)

癸巳、以金光明經二百部送置諸國、必取毎年正月上玄一読之。

という記載によく符合するのである。なお併せて大安寺伽藍

縁起并流記資財帳をみてみると、同様に

金光明經一部八卷

右、飛鳥淨御原御宇天皇、以甲午請坐者、

更にまた

繡大灌頂一具

右、飛鳥宮御宇 天皇、以癸巳年十月廿六日、為仁王會納賜者

というふうに法隆寺資財帳の場合と全く同じ色目の記載され

ていることが確められるのである。こうしてみようと、少くとも持統天皇七、八年頃には、法隆寺の金堂は、他の諸大寺と同じ格式の儀式が堂内で行われうるほどまでにすでに再建されていたものと考えて差支えないようであるが、また同時に、この持統天皇七年における仁王会のための納賜、同じく持統天皇八年における金光明經納賜が、法隆寺のみを特別に対象となされたものではない点からみて、この二つの納賜が、再建法隆寺金堂の落慶とは何の因縁もなくなされたことは明らかであり、それ故にこの持統天皇七、八年の奉納年を以て直接法隆寺金堂の再建年代を推すことには、疑義を抱かざるをえないのである。

処で、さきに抜萃した色目のうち、奉納者名のみあつて奉納年の記されていないものの一つに（註一四）

合通分繡帳貳張 帶廿二条 鈔三百九十三

右、納賜淨御原宮御宇 天皇者

という記載がみえているが、この淨御原宮御宇天皇とは、云うまでもなく天武天皇を指すものといえよう。もつとも持統天皇もまた、晩年藤原宮に遷都なさるまでは、亡夫天武天皇の後を継いで飛鳥の淨御原宮に宮住いになられたのであるが、少くとも法隆寺、大安寺両資財帳の記載例に關するかがり、その紀年より推して、淨御原宮御宇天皇は天武天皇を、飛鳥淨御原宮御宇天皇は天武天皇又は持統天皇を、飛鳥宮御宇天皇は持統天皇を夫々お指ししていることは疑いえないものと云える。とすればこの記載は、奉納年末詳とはいえ、天武天

皇によつて、法隆寺へ或る特別な繡帳が納賜されたことを伝えていたのである。では何故、この天武天皇納賜の繡帳を私は「或る特別な繡帳」と考えているのであるか、その理由を次に述べておきたい。

この天武天皇納賜の繡帳の記載をみると、通分繡帳貳張と記している。法隆寺資財帳の目録をみると、その用途によつて仏分、法分、通分、或いは聖僧分というふうに分類されている。仏分は仏像用であり、これは更に仏像名やその形状、或いは安置されている場所によつて、葉師仏分、丈六分、塔分というように細目されることもある。法分は法会講説用であり、聖僧分とは僧侶用と考えてよい。これに対して通分は、共通の用に供し得るものか、或いは何れにも属さないものとみてよいと思うのであるが、天武天皇納賜の繡帳が仏分、法分、或いは聖僧分としてではなく、殊更に用途の曖昧な通分として分類されているのは何故であろうか。天皇の納賜品であることが明記されている以上、これは普通では考えられぬことである。寺院に奉納される繡帳と云えば普通には、大安寺資財帳の記載例にもみられるように、当然仏分乃至は法分として分類されてしかるべき繡仏像や繡菩薩像などが考えられるのであるが、それにも拘らず、敢て通分として分類し、また敢て繡帳とのみ記してあるのは、この繡帳が、普通の繡仏像或いはそれに類似したものではないことを物語っている。この繡帳が、このように仏分でも法分でもないと言ふことは、天武天皇納賜の動機が、天皇御自身の造像供養

に発してはいなかったことを示しているものと云えよう。これは天武天皇の造像造寺の情熱が、当時大宮大寺の移建、薬師寺創建の発願にあつたことをみても、当然のことと考えられるのであるが、若しこの繡帳が天武天皇発願の繡仏像であれば、当然、当時の記載例からみて、

右、奉為、、、、、淨御原宮御宇天皇奉造而請坐者、

と記されてしかるべきである。大安寺伽藍縁起并流記資財帳には(註一五)次のような記載例がみられる。「納賜」と、「奉造而請坐」との差違は明らかと云えよう。

繡菩薩像一帳

右、以丙戌年七月、奉為淨御原宮御宇 天皇皇后并皇太子、奉造請坐者、

これは、天武天皇の朱鳥元年(六八六)に、天皇の御病氣平癒を祈願して、皇后と皇太子が繡帳の菩薩像を、移建すでに成つた大宮大寺に奉造なされたものである。

「通分」或は「納賜」という記載の仕方から推して、天武天皇納賜のこの繡帳貳張は、到底天武天皇の発願による奉造とは考えられない旨を述べてきたのであるが、してみると、

この天武天皇の繡帳納賜には、別の理由がなくてはならない。私は、この繡帳貳張を、かつて旧法隆寺乃至は聖徳太子に由縁の深かつた遺品の一つと考え、偶々何かの事情で天武天皇の手許にあつたものを、法隆寺金堂の再建ようやく成つた機会に、法隆寺にお返しになつたものと推測しているのである。法隆寺金堂の再建年代を、天武天皇年間にまで遡りう

るものと考えた所以である。

いま私は、この天武天皇納賜と推定される繡帳貳張を、かつて旧法隆寺乃至は聖徳太子に由縁の深かつた遺品の一つと目している旨を述べてきたのであるが、ではこの繡帳は、今日残されている遺品の何れに擬せられるべきであろうか。私は、ここで、天寿国繡帳に思い及ぶのである。上宮聖徳法王帝説に次のような記載がみえている(註一六)。

右在法隆寺藏一繡帳二張。縫著龜背上文字者更不知者云云

この繡帳二張が、現在、中宮寺にある天寿国繡帳を指していることは、繡帳造像の由来について述べた前文を引用するまでもなく、「縫著龜甲上文字者」によつても明らかであるが、ここで注意したいのは「右在法隆寺藏一繡帳二張」の一行である。ここで在法隆寺藏一というのは単に法隆寺に蔵されているというのではなく、法隆寺の蔵、即ち繡封蔵に在るという意味である。つまり天寿国繡帳は、繡仏像として金堂に奉安されることはなかつたのである。それは、この繡帳の造像由来と図相よりみて、十分に納得されることである。

法隆寺資財帳の記載例をもつて分類するならば、この繡帳はやはり仏分、法分、とは云い難く、天武天皇納賜の繡帳貳張に倣つて通分と云うより仕方がないものとも思われるし、また、なんとしても同資財帳諸色目のうち、繡帳二張とあるのは、この天武天皇納賜の繡帳貳張以外にみる事が出来ないという点より推して、この資財帳記載の天武天皇納賜繡帳貳

張を、推古天皇三十年（六二二）、聖德太子薨去の際に同妃橘大女郎によつて造像された天寿国繡帳二張と考えたいのである。なお資財帳に記された繡帳貳張の下に、この繡帳の特徴として其帋廿二条、鈴三百九十三と註記されているが、聖嘗鈔に拠れば（註一七）、文永十一年（一二七四）中宮寺信如尼は、法隆寺の綱封蔵のなかでこの天寿国繡帳を見探けているが、発見の切つかけをなしたのはこの繡帳の鈴の音であつたという。

さて法隆寺の資財帳には、いま一つ法隆寺金堂の再建年代をして、天武朝年間に推すに足る重要な記載がみえている。

即ち、同資財帳の卷末には、近江、大和、河内、摂津、播磨など各地に散在する寺領の収益とその収益用途の細目が記されているが、ここで注意をひくのは、それと並んで最後に記載されている朝廷下賜の食封の記録である（註一八）。そこには

合食封参佰戸

右、本記云、又文化三年歲次戊申九月廿一日己亥、許世德陀高臣宣命納賜、己卯年停止

の記載がみえている。

大化三年（六四七）孝德天皇の勅によつて、法隆寺に食封三百戸が納賜されたことは、すでに同資財帳の縁起の本文に明記されている処であるが、その食封三百戸は、ここでみられるように己卯年、即ち、天武天皇七年（六七九）に停止されてしまうのである。

では何故、大化三年以来三十余年にわたつた食封三百戸が、この時になつて停止されることになつたのであろうか。日本書紀天武天皇八年四月五日の条にはこう記されている（註一九）。

夏四月辛亥乙卯、詔曰、商量諸有食封寺所由、而可_レ加加之、可_レ除々之。是日定諸寺名也。

壬申の乱によつて皇位の篡奪を敢てなした天武天皇は、治世十四年間、徹底した天皇親政を期するために、次々と詔を下して旧制度につながる絆を断ち切つてゆくのであるが、旧来の食封に対して再検討を命じたこの詔も、その一つの現れと云える。なおここで、この食封に関する詔のあつた日本書紀紀年の天武天皇八年は、法隆寺資財帳に記されている食封停止の己卯年、即ち天武天皇七年（六七九）を指すものであることを、断つて置く必要がある。というのは、日本書紀の天武天皇紀年は壬申の乱のあつた弘文天皇元年を天武天皇元年と数えているので、実年より日本書紀天武天皇紀年の方が一年づつ多くなつていたのである。してみると、法隆寺資財帳記載の己卯年食封停止は、天武天皇のこの食封商量の詔によつてなされた結果であることは、あまりにも明白である。ここで注意すべきことは、この詔が、かならずしも食封廢止を命じたものではなく、寺の所由を商量した上で、増すべきは増し、除むべきは除めよと述べている点である。法隆寺の場合もこの「寺の所由が商量」されての上でなされたものとなれば、天武天皇七年（六七九）に法隆寺の食封が停止され

たということは、とりも直さずその頃までには、法隆寺の再建工事もようやく進捗し、すでに金堂は竣工された状態にあったということを物語るものではないだろうか。

法隆寺金堂の再建年代について、いくらか考察してきたのであるが、私の結論とする処は、要するに天武朝の半ばには法隆寺金堂の再建は略々成つていたということである。天智天皇九年（六七〇）の罹災後、すでに十年を経過しているわけであるが、五重塔や中門の造営はさらに遅れ、ようやく伽藍としての体裁を整えるためには、すでにみてきたように和銅年間、即ち金堂再建後三十年をまたなければならなかったのである。

さて、法隆寺金堂の再建年代の推定をここに入れて、ようやく玉虫厨子がいつ如何なる理由によつて、法隆寺金堂に安置されるようになったかという、玉虫厨子の由来に関する問題も、解明の緒口を見出しえたものと思われる。さきに私は、聖德太子伝私記亦名古今目錄抄において、玉虫厨子をして、「橘寺滅滅之時、所送者也」とする顕真説に拠つて、その移坐年代を、日本書紀に伝えられている天武八年（六八〇）の橘寺失火の前後と一応見做しておいたのであるが、この橘寺よりの移坐説が成立するためには、橘寺失火のあつた天武八年頃には、法隆寺金堂の再建工事は、概ね竣工の域に達していなければならぬことになるのであるが、すでにみてきたように、法隆寺金堂の再建年代は、天武朝半ばと推定してまず誤りないものと思われるので、天武八年前後における玉虫

厨子移坐は十分に考えられる処である。従つて玉虫厨子を、「橘寺滅滅之時、所送者也」とする顕真説は、この「橘寺滅滅之時」を、承暦二年（一〇七八）の橘寺小金銅仏四十九軀移遷を余儀なくさせた「橘寺衰退」の時期とみる従来の通説を排して、日本書紀天武紀に記された天武八年（六八〇）の「橘寺尼房失火」後のこととみさえすれば、決して不都合とは思われないのである。

処で、ここに更に問題が残されている。というのは、玉虫厨子にはたしてここで目されているような移坐仏であるかどうかについてである。すでに述べたように、私は、法隆寺資財帳における「宮殿像貳具」中の一具を玉虫厨子を指すものとみてきたものであるが、この色目に関する同資財帳の記載は（註二〇）

金塗銅像捌具

金塗押出銅像參具

宮殿像貳具 一具金塗押出千仏像

金塗灌仏像壹具

金塗千仏像壹具

金塗木像參具

右、人人請坐者、

となつてゐる。ここでみられるように、諸仏像六つの色目はすべて一括されて「右、人人請坐者」となつてゐる。この点に關して、かつて源豐宗氏は、次のように疑義を述べておられる（註二一）。

「資財帳を見ると、他の四五の仏像と共に宮殿像貳具も人請坐者と書かれてゐる。請坐とは奉納といふ程の意味である。他の寺より移し來つた仏像を奉納と云ふのは一寸考へられない。」

故に、資財帳記載の宮殿像をもつて、これを眞眞の云う移坐像と目することは出来ないと言うのが源氏の説である。そこで源氏は

「太子伝私記の説をとれば、資財帳所載の宮殿像は現在の玉虫厨子を意味してゐない事になるのである。そして資財帳の此の記事は、太子伝私記の説を排してまでもそれが、現在の玉虫厨子に該当する事を主張し得る程の強さを有するものではない。何故なればこの玉虫厨子の如き形式を有する千仏宮殿は、天平以前には必ずしも珍らしくなかつたからである」

と述べているが、この推論の前提となつた、源氏の「人人請坐者」に対する解釈は、はたして妥当と云えるであらうか。この問題に対する私の見解を次に述べておきたいと思う。

さて源氏は、人人請坐と書かれている請坐とは、奉納という程の意味なので、他の寺より移坐した仏像を指すとは一寸考へ難いと述べていられるのであるが、源氏のこの疑義には別段深い根拠は見当らない。宮殿像をはじめ人人請坐によるこれらの諸像は、その造像由来については未詳であり、かならずしもすべてが最初から、法隆寺請坐の目的をもつて発願造像されたものとは考えられない。若し、特定の発願によつて

法隆寺に造像供養されたものであれば、法隆寺資財帳や大安寺資財帳の記載例にもあるように、例えば（、、点筆者）

金湍洞釈迦像壹具

右、奉為上官聖德法王、癸未年三月、王后敬造而請坐者（註二二）

又

花嚴經壹部 八十卷

右、奉為天朝、天平七年歲次乙亥、法藏知識敬造者、（註

二三）

或は又

即四天王像四軀 在仏殿

右、淡海大津宮御宇 天皇奉造而請坐者、（註二四）

にみられるような、略々一定した記載形式が踏まれなければならぬのである。それ故、それ以外の「請坐」或は「納賜」の諸仏は、たとい寄進年や寄進名が明記されていても、それはかならずしもすべてが、最初から法隆寺請坐の目的をもつて発願造像されたものであつたとは云い難く、なかには他の寺院や個人の所有する伝世仏の寄進もかなりあつたものと考えられるのである。してみると「人人請坐者」のこの宮殿像が、橘寺から移坐された玉虫厨子であつたとしても、少しも不都合はないのである。

さきに私は、同じく、法隆寺資財帳に記載されている、天武天皇納賜の繡帳貳張が推古三十年太子妃橘大女郎造頭の天寿国繡帳貳張に擬せられる旨述べておいたのであるが、橘寺

より移坐された玉虫厨子も、またこの天寿国繡帳も、ともに太子に由縁の深い遺品として、夫々再建ようやくなつた法隆寺金堂に寄進されたものと考えられるのである。玉虫厨子が天武天皇八年の橘寺失火の頃に法隆寺に移坐されたものと思れば、その移遷年代は天武天皇による天寿国繡帳納賜の時期と、概ね符合するものと云えよう。金堂の再建とともに、

旧法隆寺乃至太子に有縁の遺品が、太子と関係の深かつた諸寺、諸人から続々と寄進されたであろうことは、想像に難くないのである。何故ならば、「一屋無餘」という天智天皇九年の猛火によつて、旧法隆寺の秘蔵は、恐らく僅かを残して、すべては堂宇とともに灰燼に帰したものとと思われるからである。ここで「右、人人請坐者」における「人人」は、単なる信徒一般を意味しているのではなく、補闕記や伝暦にみえている(註二五)

斑鳩寺被災之後。衆人不_レ得_レ定寺地。

における「衆人」にかよう太子有縁の人々と云えよう。

旧法隆寺乃至は太子有縁の品々が、再建金堂へ寄進されてくる様子を伺わせる例を、他にも幾つか、法隆寺資財帳のなかに拾うことが出来はしないだろうか(註二六)。例えば

金塗銅灌頂壹具

右、片岡御祖命納賜、不知納時

にみえている片岡御祖命が誰方を指すものか判然としないが、同資財帳の縁起に、推古天皇下賜の播磨国佐西地五十万代の布施を「伊河留我本寺、中宮尼寺、片岡僧寺、此三寺分

為而入賜岐」と記されているので、法隆寺の末寺とも云うべきこの片岡僧寺と関係のある人か、或は太子の御子片岡女王を指すものか、何れにせよ太子有縁の人とみて差支えないと思われる。なおこの金塗銅灌頂は、今日、法隆寺献納金銅灌頂幡をさすものと一般に考えられている。

更にまた、これはともすれば見忘れがちであるが、同資財帳には、伎楽壹拾壹具の記載がみえている(註二七)。それを現存している法隆寺献納伎楽面によつてみれば、飛鳥様面は樟製彩色であり、桐製の奈良様とは容易に区別されうるので、これらの飛鳥様伎楽面も、金堂の再建後に太子有縁の推古諸寺から施入されたものとみて差支えないであろう。

このようにして、天武天皇年間、旧法隆寺乃至は太子に有縁の遺品が、再建成つた法隆寺金堂に、次第に寄進されていったものと考えられるのであるが、玉虫厨子もまた、その一つであつたと考えても、恐らくは推測に過ぎることはないものと思われる。玉虫厨子がこのように旧法隆寺乃至は太子に由縁のある遺品であつたとするならば、玉虫厨子の制作年代も、ここに自ずと定まつてくると云わなければならない。

こう考えてくると、玉虫厨子を「推古天皇御厨子也」とする顕真の説も、その由緒の如何は別としても、少くともその制作年代を考える上では、いま一度再考慮されて然るべきものと思われるのである。

(註一) 既出「日本書紀」(四) 二〇〇頁

(註二) 前掲書 一九八頁

- (註三) 既出「聖德太子御伝叢書」 五頁
 (註四) 前掲書 四一頁
 (註五) 同 四頁
 (註六) 同 七頁
 (註七) 続群書類従第二七輯 四六六頁上
 (註八) 日本古典全集伊呂波字類抄十卷本第一 二九
 (註九) 既出「大日本古文書」(一) 五八二頁
 (註一〇) 久野健「法隆寺の彫刻」 五七頁
 同氏の「白鳳文化」日本歴史講座所収 二〇七頁より二
 一頁参照
 (註一一) 既出「大日本古文書」(一) 五八三頁、五八四頁、五九
 三頁、五九六頁、六〇一頁
 (註一二) 既出「日本書紀」(内) 二〇五頁
 (註一三) 前掲書 二〇九頁
 (註一四) 既出「大日本古文書」 五九六頁
 (註一五) 前掲書 六二八頁

- (註一六) 既出「聖德太子御伝叢書」 四六頁
 (註一七) 前掲書 四八三頁
 (註一八) 既出「大日本古文書」(一) 六二一頁
 (註一九) 既出「日本書紀」(内) 七六頁
 (註二〇) 既出「大日本古文書」(一) 五八一頁
 (註二一) 源豐宗「玉虫厨子及其の絵画について」仏教美術第十
 三冊 一四頁
 (註二二) 既出「大日本古文書」(一) 五八〇頁
 (註二三) 前掲書 五八三頁
 (註二四) 同 六二八頁
 (註二五) 既出「聖德太子御伝叢書」 七頁、四一頁
 なお「伝暦」は「寺被災之後、衆人不_レ得_レ定_二寺地_一」と
 なっている。
 (註二六) 既出「大日本古文書」(一) 五九六頁
 (註二七) 前掲書 六〇七頁